

仙台六大学野球

春季リーグは24日、仙台大が10勝2敗で2季ぶり4度目の優勝を飾り、閉幕した。エース熊原健人を中心とした投手力を武器に接戦を勝ち抜き、春連覇を果たした。

熊原の存在感は別格だった。防御率0・63はリーグ1位、4戦連続完封で挙げた4勝は最多タイ、奪三振44は2位。特に、優勝への関門となつた東北福祉大戦では1、3回戦に先発し、いずれも110で完封勝利。ピンチでも制球を乱さない精神力の強さが際立った。

左腕影浦雅人の奮闘も見逃せない。東北学院大戦の2勝を含む3勝をマークし先発、救援にフル回転した。

総評

仙台大の熊原 別格

福祉大 直接対決に破れ涙

打線はチーム打率2割5分8厘ながら、福祉大戦では好機を生かす勝負強さを見せた。打率3割8分6厘の3番松本桃太郎、1番打者の1年生鳥井凌の活躍が印象的だった。

2位の福祉大はチーム防御率(0・68)、打率(3割2分7厘)共に1位。4勝の佐藤優を筆頭に投手は安定し、打線も首位打者の長坂拳弥や打点王の楠本泰史と好打者がそろつた。ただ、仙台大戦で熊原の壁を破れず涙をのんだ。学院大は3位。主戦本田圭佑が3勝を挙げたが、仙台大戦で連投を強いられるなど、投手陣の駒不足が順位に響いた。2勝を挙げた2年生長鈴悠平の成長に期待したい。チーム打率はリーグ2位の2割

8分5厘。課題はリーグ最多の94残塁を記録した決定打不足の解消になるだろう。

宮城教育大は19季ぶりの4位。突出した選手はいないが、チーム力で勝ち点2をもぎ取った。5位の東北工大は久慈朋弥、吉田洸太の2年生コンビが打撃好調だった。菊地和成に次ぐ投手育成が急務だ。Aクラスを狙った東北大は6位。秋の巻き返しに期待したい。

今季は、コールドゲームが昨秋の8試合から15試合に増えた。大味な試合は、投手陣の無駄な四死球や守備の乱れが要因となる。投手は制球力、野手は球際の強さを磨き、秋は1点を争う好ゲームが増えることを望みたい。

(佐藤琢磨、及川智子)